

皇后陛下御歌集

『瀬音』増補改訂版

(大東出版社)

上皇后の皇太子妃・皇后時代の歌四六〇首。家族を思う細やかな心がいい。自らの岐路をふり返りもした。

かの時に我がとらざりし分去れの片への道はいづこ行きけむ

上皇とともに疎開世代として平和を求めた半生であった。が、海外の皇室の戦争責任を求める声は強かった。

慰霊碑は白夜に立てり君が花抗議者の花とともに置かれて

そしてバンザイクリフに立った。

いまはとて鳥果ての崖踏みけりしをみな足の裏思へばかなし

災害のたびに、被災者たちを励ました。かの禍ゆ四年を経たる山古志に牛らは直く角を合はせる

今を生きる者として宇宙開発やワールドカップ南アフリカ大会も確ととらえる。

名を呼ぶはかくも優しき宇宙なるシャトルの人は地の人を呼ぶ

ブゼラの音も懐しかの国に笛鳴る毎にたたかひ果てて

同時代史としても興味深い。(水辺 あお)

吉川宏志歌集

『石蓮花』

(書肆侃侃房)

パsword\*\*\*映りいてその花の名は我のみが知る

裏漉しのような秋の陽 図書館の机のひとつひとつを照らす

身辺の対象ひとつひとつの、ともすれば見過ごしがちな姿を丁寧によく上げる第八歌集。詠まれるのはただ目に見えるものだけではない。吉川の想像力は、目に見えないもの、存在しないものの在り方へと飛躍する。

息子には息子の闘い 冬の野の遠いところで尖りゆく見ゆ

家族、特に子を詠んだ歌が印象的だ。子の成長に伴う距離感の変化、そして家からの独立といった環境の変化を、感情のかすかな動きまで濃やかに表現する。

バラの花渦ふかぶかと描かれおり母の絵はみな母を畏う

歌集終盤では母の死が詠まれる。母の死を様々な形で受け入れようとしつつ、生前の母の見てきたものに想像を馳せることで、母の生の証を自身の歌の中に打ち立てようとする。

(三沢 左右)

千葉聡著

『90秒の別世界 短歌のとなりの物語』

(立東舎)

現役高校教師でありながら様々な分野で活躍する歌人「ちばさと」こと千葉聡さんの短編小説集。見開きで完結する百の物語と、そのおわりに添えられた現代短歌と、じんわりと溶け合う。

歌の作者は、白秋、晶子、啄木から大松達知、小島なおまで時代を大きくまたいで豪華な顔ぶれである。出会えて良かったと感じられる歌ばかり。そしてストーリーは奇想天外。

亡くなった婚約者の声を聞くため、毎日シャキシヤキもやし味噌ラーメンのもやしをかみしめる女性。いつかニンゲンを食べてやろうと、海に住みながら赤潮の改善に役立っている宇宙人たち。なぜか白い部屋を磨き上げることに無上の喜びを感じて生き続けるその人は死刑囚……。

この本から、ショートショート集「5分後に意外な結末」シリーズにも採用されたという。一話読み終えるたびに、人生、未来、宇宙にまで思いを馳せ、しかしその短さとおもしろさゆえに結局、夜を徹して百話読んでしまった。

(小川 和恵)